



誰にでも出来る保育への挑戦

～自然の中だから出来ること～

4年ぶりに「四季をめぐる子どもの暮らし」発行に向けて動き出しました。20号から再スタートです。

この4年間に私たちは、新たな挑戦をしてきました。それまでの22年間、少人数でありながらも子どもたちが集まってくる幼稚園でしたが、近年、子どもたちが少なくなりました。それでも出会いがあり、子どもたちが一緒に歩んでいます。

子どもたちの毎日を親と保育者が一緒につくっていく共同保育、今も昔も変わらないとも言えるし、変わり続けているとも言えます。子どももおとなも、めぐりあった者たちが、一緒にやろうと臨むことですので、その時の顔ぶれによって変化するものです。

特におとなは、教育制度の枠にとらわれない決意をすることになるのですが、おとなが子どもを動かすことをやめて、子どもの世界に好奇心をふくらませて、子どもと

ともに楽しんで歩むことが、共同保育の本質ではないでしょうか。

もみの木園26年目、誰にでも出来る保育に挑戦しています。子どもとつくる保育は、誰にでも出来る保育なのです。子どもが始めたことを大事にすること、子ども自身が遊びを見つけること、子どもの心が動き出すことから保育が始まります。毎日、何が始まるか、ひとりの子どもが始めることも、子ども同士の響きあいでも始まることも、どんなことでも今日という日のために大事なことばかりです。ひとりひとりがやり始めたことが、遊びのもとです。遊びは子どもが、自分で生み出すものですから。

ある朝、舞岡公園けやき広場に集まると、すぐに木登りを始める子どもがいます。小さな木ですが、次々と子どもが登りあちこちの枝に座っています。仲良しのおじさんから「お猿さんかと思ったよ」と言われました。どんぐりを拾いに行く人もいます。あっという間にポケットにどんぐりがこぼれ落ちそうになっています。 2ページへつづく▶



ある朝、舞岡公園けやき広場に集まると、すぐに木登りを始める子どもがいます。小さな木ですが、次々と子どもが登りあちこちの枝に座っています。仲良しのおじさんから「お猿さんかと思ったよ」と言われました。どんぐりを拾いに行く人もいます。あっという間にポケットにどんぐりがこぼれ落ちそうになっています。

広々とした原っぱを円を描いて走る子ども、その子どもを追いかける子ども、ふたりはお互いに一緒に走っていることが嬉しくてたまらない様子。けやき広場の真ん中に大きな水たまり、何人か水たまりに入って、バシャバシャ水しぶきを上げています。小さな水たまりにしゃがみ込んで泥をこね始めた人も、水たまりに葉っぱを浮かべている人もいます。水たまりに空と雲が映っているのを見つけた人が、水面を指さし「雲!」と驚きの声を上げました。草むらで、バッタを追いかけている人もいます。バッタを捕まえると、みんなに見せにやってきます。バッタを見たくて集まった子どもたち、自分の手でバッタを持って見たくて、手から手へバッタを手渡し、バッタを持ちたい気持ちを分かち合っています。お母さんたちが作ってくれた布絵本の中にある「むし」たちも、子どもたちは触りたくてかわりばんこに手に持ち、本物の虫を見続けるのと同じようにフェルトの「むし」を見続けます。

見つめる子どもの瞳が輝き続けるのは、子ども自身のイマジネーションで虫と遊んでいるからでしょう。土を掘っている子どももいます。土の中から出てきたものは、タイルのかけら。これは宝物です。大きなメタセコイヤの木を見上げると、葉先にセミのぬけがらがいっぱい。子どもたちは手が届かないので長い枝を探してきて、(長い枝がどこにあるのかも知っています)背伸びして長い枝を動かし、セミのぬけがらがを落とし始めました。他の子どももどんどん拾って、セミのぬけがらが子どもの手に山盛り

になっていました。子どもが一年中外で遊ぶということは、まず最初に向き合う相手が、自然そのものなのです。土も水も木も草も虫も空も太陽も雲も風も雨も、子どもが自分で受けとっていくのです。子どもは本来、自然なものですから、人工的な物しか出会ったことのない子どもも、すぐに自然に近づき受け取ることが出来るのです。そんなひとりひとりのわくわくする楽しいエピソードが、もみの木園の日常にちりばめられています。

ここでお伝えした子どもたちの姿は、どのように感じられるでしょうか。子どもがやっていることであり、それ以上に必要なことがあるとは思えません。おとなが動かすと、まったく違う子どもたちになるでしょう。

子どもが、いろんなことを遊びにしていけるアイディアは、自然の中だから生まれているのだと思います。自然の中だから子どもたちに任せておけばいいのです。危ないことも含めて、いろいろあっても一緒にやっていくことが、子どもの暮らしだと思うのです。こうして誰にでも出来る保育が構想され、ただ今実践中です。

子どもたちは、遊びのおもしろさに心を満たして、帰っていきます。そしてまた明日!
…毎日が紡がれて四季をめぐる。

もみの木園 園長 尾上陽子

1998年に6人の母親たちと共に「もみの木園」を創立。以来26年間、子どもたち主体の保育を実践し続けている。



てんてんてんらんかい 2023 開催御礼!

2023年8月25~27日、栄区のリリスギャラリーにて、毎年恒例のもみの木園とクラブの子どもたちによる「てんてんてんらんかい」が開催され、会期中270名もの方々にお越しいただき、子どもたちの絵を分かち合うことができました。改めて御礼申し上げます。ウェブサイトにて展示会場の様子が写真、動画にてお楽しみ頂けます!





2022年3月に参加した「バリアフリー読書研究会」で、はじめて布絵本のことを知りしました。実際に見てみると地域の図書館を訪ねたりもしましたが、情報がなかったり取り寄せる必要があったりとなかなか実物にたどり着けませんでした。誰もが楽しめるようにと生まれた布絵本のはずなのに、手にするまでにたくさんの方の困難がある：そのとき、布絵本のある世界との間に、見えない壁があるように感じました。「障害のあるなしに関わらず、すべての子どもに絵本の楽しさと出会ってほしい」と生まれた布絵本が人の手に届きにくい現状を変えるために、社会に私たちができることは何だろうと考え始めたのです。

その矢先、バリアフリー図書に力を入れている相模原市立図書館の方のお話を聞く機会があり、もっと布絵本を知るためにすぐに訪問させていただきました。相模原市で長年、布絵本作りの活動を続けて来られている団体「おはなしワニース」のみなさんが作られた布絵本を手にとると、触れる人のことを考え尽くした素材選びや、細部まで配慮の行き届いた繊細な作りを直に感じて、これを見たら子どもたちはどんなに喜ぶだろうと私たちも心をうばわれたのです。

それから年度が変わってはいまりの日。新たなスタートのお祝いにと、札幌で50年以上も障害のある子どもたちのための布絵本作りに取り組まれている「ふきのとう文庫」から布絵本「むし」の製作キットを取り寄せ、春休み中にお母さんたちで作り上げ、子どもたちへプレゼントをしました。

手渡した直後から、子どもたちは思い思いに絵本やむしたちを手にとり遊んで、絵本を飛び出して本物の木に止まらせたり、草むらの中を探検したり。夢中になって遊ぶ子どもたちの姿と、布絵本から広がる子どもたちの想像の世界に大人の私たちもワクワク。布絵本は、子どもたちにとって単なる「絵本」や「おもちゃ」とは少し違って、絵本の中から飛び出し、絵本と子どもと世界を繋いでくれる存在なのかもしれません。

(卒園生母 実春奈)



▲布絵本「むし」

四季をめぐる母の暮らし

その1



もみの木園で親が担う仕事は保育から倉庫整理まで多岐に渡るが、特に今年度、私は春からの布絵本づくりに始まり、運営に関する事でも初めてのことに多く取り組んできた。

ビジネス・サービス化する幼児教育や保育は需要も供給も高く、もみの木のような「子ども主体」の保育や教育は常に絶滅寸前という現実と直面してきた。それが園児減少によりよいよ崖っぷちに立たされ、会計係として昨年度中に終えなければならなかった作業をやり直したり、前例がない中、手探りで進めていた。

園のお母さんたちと絶えず意見交換したり、日々の保育、そしてこれからの保育について考え続けているうち、今までは持てなかった視点で園の運営について考えたり、どうしていくべきか真剣に向き合う時間が増えた。その間も、チラシ作りや資料の作成など、一つ終わればまた次が…と毎週何かしら締め切りを抱えている多忙な状況が続いていた一方で、子どもたちが

喜ぶだろうと思いついたおやつ焼き芋アイスづくりや、お弁当交換(我が子以外の子の為にお弁当を作る)に楽しく取り組んだり、やっていることは増えていくはずなのに、不思議と子どもたちの事を思い、一緒に楽しめる心の余裕が生まれていた。

これまででも、標準的な幼稚園と比べて親が園の運営に多く関わったり、時間を作る事には表面的には変わりがなかったかもしれない。でも振り返ると、色々なことを言い訳にして時間ややる事に追われるか、ただ誰かの後をついていく感覚だったのだろう。けれど、もみの木のような小さな園を存続させていくには、とにかく一日一日、自分が今できることをやってみるしかないと思った。

いま自分が、子どもたちのためにできることは何か。自分がやりたいと思いついてやってみる事と、人からやらされる事とはまるで違う。子どもたちのように「今」を味わい、「やりたい!」と子どもと一緒に生活を楽しむ。園の存続に限らず、子どもたちが希望をもって生きられる社会を築いていけるよう、まずは自分ができることをやってみる。一人ひとりの力は小さくても、その一人が動く事で地域や社会が変わっていくのだから。そんな思いが今の私を内側から突き動かしてくれている。(すみれぐみ母 眞野絵美)

四季をめぐる子どもの暮らし



仲間のいる暮らし

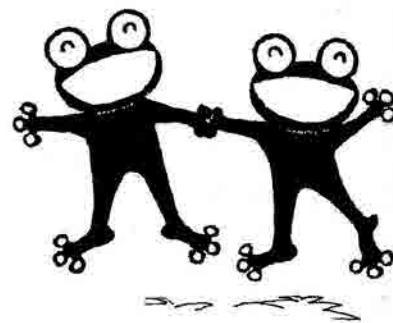
もみの木園の始まりは、めぐり会った子どもたちが障害があるからと別の場所に行かなくてもいいように、親と保育者が共同で子どもたちの幼稚園をつくったことからでした。当時、インクルージョンなんて誰も知りませんでした。しかし発足メンバーの誰もが、障害があるからと子どもを分けることを受け入れられない感覚を持っていました。ごく当たり前のことでした。

いつの時も目の前にいる子どもたちは、ひとりひとりが個性豊かで、ありのままの自分を誇らしく見せ合って、お互いに毎日会えて遊べることを喜び、明日を楽しみに生きているのですから、おとなは心から応援せずにはいけない…そんな思いを原動力にして歩んできました。今も昔も変わりません。

インクルージョンとは、すべてを含むという意味です。インクルージョンについて「通常の社会に、障害を持つ者が入れてもらうというイメージがあったが、もみの木園の保育で経験したことは、子どもを障害児と健常児とに分けない、子どもは、障害のあるなし以上にひとりひとりが多様で、日々、心持ちで変化し、前へ突き進もうとしたり、後ろ向きにうずくまり苦しそうだったり、バンバン人を叩いたり、表情を硬くして戸惑ったり…いろんな子どもがいる。でも子ども同士、みんなが近くに存在し合い、互いに内包しあっているように感じる。これは子どもの世界の仲間だからなんだと思った」とあるお母さんが言いました。従来、障害児として分けられて別の所にいる人が、入れてもらうのとは違う、これがフルインクルーシブだと感じたのだそうです。さらに「子どもにとって友だちが、生活の中の大きな存在になっているから、普段、生活している自分の心持ちが違う。仲間とつながっていることから力を得て、自信になっているのだと感じる」と続けました。私たちは、小さな小さな子どもたちから、お互いを包み合う人間社会を築いていけることを教えてもらえるのです。

久しぶりに遊びに行った上郷の森での帰り道、これまで歩いたことのない山道を歩きました。日当りの良い尾根道でしたが、周りの風景を見たことがないので、このまま進んで帰れるのだろうか心配になった子どもが「だんだんお家が遠くなるような気がして怖いよ」と泣き出しました。とたんに子どもたちが集まり、両方から手をつなぎ、前も後ろもみんなが囲んで「そばにいるから心配いらぬよ。ようちゃんが道知ってるから、一緒に帰ろうね」と励ましました。その後、岩肌が表れたけわしい下り坂も、子どもたちが一体となって手に手を取り、助け合って進み、よく知っている道にたどり着くことが出来ました。みんなであつた達成感、お母さんたちが待っている所までもうすぐ、最後に急な階段があります。いつもそこは通らず平らな道を遠回りするのですが、さっき初めての道が怖くて泣いた子どもが、階段の上り下りに助けがいる子どもに「今日は、この階段下りてみる？」とたずねました。階段に差し掛かるところから、長く続く階段を見下ろし、その子は「行かない」と決めました。ならばいつものように平らな道を進みながら、ふたりで話し始めました。「さっきの階段、怖かった?」「うん、怖かった」「あの階段、一度も下りたことないよね。でも舞岡であそこと同じくらい急な階段、下りてるんだよ。舞岡は毎日行って慣れてるから、怖くなくなったんだよ。上郷は時々しか来ないから…そうさ!舞岡みたいに上郷に毎日来ることにしようよ。そしたら慣れて、怖くなくなるよ」なんと名案ではありませんか。自分が怖がりだから、怖い人の気持ちが分かるのです。怖い気持ちに寄り添いながら、そこに留まらないで怖さを乗り越えられる方法を考えたのです。一緒に次に向かうことを約束し合う子どもたち、心強い仲間同士です。

あと2か月足らずで卒園する子どもたちが、「卒園するってこういうことなんだよ」と教えてくれたようでした。(文・尾上陽子)



ぬのえほんとこどもたち ～こどもの手の中から物語がうまれる～

戸塚図書館の「りんごの棚」開設を記念して、もみの木園で作った布絵本が館内に展示されました。こどもたちの手の中で、どのような物語が生まれるのでしょうか。

バリアフリーな布絵本 ～ねがいは^{ウィズ}WITH～

バリアフリー絵本には、いろいろな種類があります。そのひとつである布絵本は、さまざまな素材の布やフェルトで作られており、目の前にいるこどもに合わせて作ることができます。

こどもは誰もが、個性豊かな色とりどりなひとりひとりで、尊いひとりひとりが、生まれてはじめて友だちに出会い、いっしょに絵本の世界を楽しめるよう、もみの木園では布絵本の制作をはじめました。作ってはこどもに手渡し、こどもたちが手にとり、心を動かす様子を見ながら、作り手のおとなたちはこどもの世界を知りはじめます。

布絵本は、こどもたちとともに育んでいくものです。どんなに汚れても洗えば大丈夫、こわれてもいくらでも縫い直せます。こどもに合わせて新しく作り直すこともできます。

布絵本は、こどもたちの誰もが絵本の世界をともに楽しめる、最高のバリアフリー絵本です。

もみの木園の布絵本づくり

もみの木園では園誕生のときから、障害のあるなしにかかわらず、こどもたちがいっしょに育ちあうことを大事にしてきました。絵本もみんなで分かち合っていて楽しんでいますが、絵本「そしたら そしたら」の最後のページにあるすごろくは、みんなで囲むには小さく、2、3人ずつに分けてすごろく遊びをすることになりました。

みんなで囲んですごろくをやりたいな、紙だとやぶけやすいから、布で作ってみよう。みんなが囲める大きさの、布のすごろくを思いつきました。出版社に著作権利用許諾申請の手続きをとって、こどもたちに手渡していける布すごろくが出来上がりました。これが、もみの木園の布絵本のはじまりです。

布すごろくを野原に広げると、子どもたちがすぐに周りを囲みました。サイコロを投げる人、取ってくる人、手渡す人、コマを動かす人、絵本のストーリーを思い描きながら、こどもたちの声が響きます。それぞれが自分のやりたいことを、やりたいように表現しながら、遊びの世界をともに楽しんでいます。

のやまであそぼう



のやまであそぼうは、地域の子どもたちともみの木の子どもたちが出会い、一緒に遊べる場になるようにと月に1回開催しています。今年度秋以降、「また来月も」と継続で参加を希望する方が増えてきました。1回目は初めての場所、初めて出会う人だったのが、2回目来たときにはこの前遊んだ場所、一緒に遊んだ友だちとなり、子どもたち同士の関係が築かれていきます。もみの木の子どもたちも「あとなんかいねたららのやま?」「〇〇ちゃんはまたくる?」とのやまの日を心待ちにしています。

のやまであそぼうの日は、お客さんがたくさんでドキドキしていたもみの木園のかいとくん(3歳)。いつもと違う雰囲気を感じ、これまでみんなからは少し離れたところで過ごしていました。ところが今回ののやまが始まると、前回遊びに来た子どもが、木の幹にもたれて立つかいとくんの横に並んで同じようにマネをして同じ木の幹にもたれかかります。その子の行動に「あっ!」と驚いたかいとくんでしたが、次の瞬間笑顔に。2人の間で何も言葉はないのですが、2人が出会い、何かが始まっていくような温かな空気に包まれていました。その後一緒に過ごした田んぼでは、2人で追いかけ合い楽しそうな様子に私もとても嬉しくなりました。

次に取り組んだのは、札幌のふきのとう文庫から布絵本「むし」の製作セットを取り寄せて、もみの木園の親たちが共同制作し、こどもたちの進級のお祝いに贈りました。

布絵本のむしたちは、絵本を飛び出し、こどもたちの手に。そっと手に乗せたり優しく触ったり、その触り方は本物の虫と同じよう。布の手触りを味わいながら「むし」と出会い、ひとりひとりの小さな手の中で物語がうまれているような光景でした。

こどもたちは自然の中で、布絵本と自然界の生き物と線を引き分けることなく、まさにバリアフリーな世界をつくっていくのです。

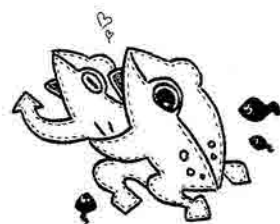
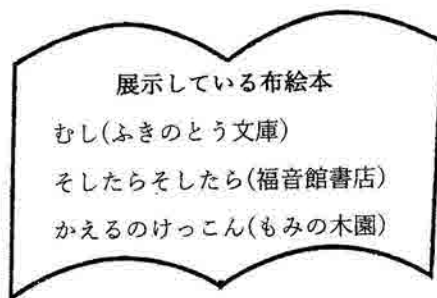
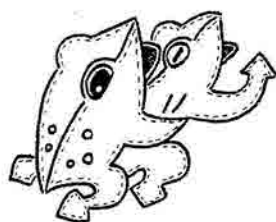
これら2つの作品を通して、こどもたちの誰もがともに楽しめる布絵本作りを土台にしながら、もみの木園オリジナル布絵本「かえるのけっこん」が完成しました。おはなしのある布絵本ははじめてでしたが、こどもたちはここでも手にしたかえるをじっと見つめ、かえると自分の間にゆきかう気持ちを満たしていくかのような表情と出会うたびに、ことば以前の時代のこどもの手の中から、物語がうまれていくことを感じとることができます。

“ぬのえほん と こどもたち”

おとなの想像をはるかに越えた、たくさんの物語がこどもの手の中からうまれました。こどもたちの誰もがお互いに心を通わせながら、自由に広がっていく物語を紡ぎ合って、心ゆくまで楽しんでほしい。そんな願いを込めて、もみの木園では布絵本を作っています。



2024年2月9日(金)~2月29日(木) 戸塚図書館にて布絵本展示中です。ぜひお手にとってご覧ください。



自分もやりたい!という思いから、マネをしてマネをされて心を通わせ仲良くなっていくのだと小さな子どもたちの跳びはねるような心の動き、体の動きから感じることができました。

もみの木の大きな子どもたちにとってもそんな小さな子どもたちのエネルギッシュな姿は可愛くて魅力たっぷり!前回に続き、大きな子どもたちから始まった田んぼの上屋前での泥のチョコレート屋さんも小さな子どもたちを誘い大にぎわい。枝で地面を掘り、水を運び、泥をこねこね遊ぶ様子に興味津々の参加者の子どもたちは、すっかりもみの木の一員となり一緒に輪の中に入り遊んでいました。

のやまであそぼうは、子どもたちが自然の中で遊び、子どもの時間がつくられていくことを願って、もみの木園がその「場」を提供していますが、参加者のお母さんたちも子どもたちと打ち解けて、子どもたちと関わり、夢中になって遊ぶ子どもたちの姿を喜び合い、出会えたひとりひとりがのやまであそぼうの一日を一緒につくり上げていくエネルギーを感じます。

こんなにおおらかな気持ちで子どもたちを見守り合えることが、子どもがのびやかに育っていく源となるのではないのでしょうか。

すみれぐみ母 佐嶋実咲